

2023年1月分総評 杉本真維子

「座布団の角の艶めく初稽古」篠遠早紀（東京都）

初稽古に臨む人への視線が描かれています。その場全体のひきしまった空気がよく表わされています。

「空へ差し出す／裸木の枝（え）のぬくみ」篠遠早紀（東京都）

「ぬくみ」はそんなところにもあり、かつ、差し出されているんですね。何のために、と聞く私たちもまた、自らのぬくみを何かに差し出しているのでしょうか。

「凶暴になってみたい／そのあとは／天をつらぬく塔になりたい。」青木雅（埼玉県）

これは祈りの姿だと思いました。暴と祈りの邂逅が心を打ちます。

「石塀に彼らが散っていくことを／桜と呼んだ天体が、ここ」からすまゑ（神奈川県）

語順の力でかけられていく重心が、「ここ」の重みとつりあっている気がします。

「通園バス暗い窓から子らの顔／晴天とは余りある独房」志内悠真（京都府）

巨大な「いまここ」に囚われた私たちの身体をありのままに描こうとしています。

「寿司というものあるらしく／蟹せつせつと思いつめる」長谷川柊香（宮城県）

ユーモアというものの奥深さ。喜怒哀楽には収まりきれない感情がこぼれます。

「春を待つ／はるっておなかすくのかな」にしざわゆうと（福井県）

子どものような素直な言葉の投げ出し方が魅力です。このように書くのはじつはなかなか難しいことだと思います。

「このねばっこいのが呪い／羊水の甕ひたひたと潮が満ちゆく」大嶋碧月（石川県）

ミソジニー（とくに自分自身に対するもの）は多くの女性が持っているものかもしれませんが、コントロールしにくいものをうまく抑え込んで言葉にしていると思います。

「つかれて何もできない／手を近づけて手を大きくする」立花ぼとん（東京都）

手が大きく見えることと手が大きくなることの二つが一致しています。現象学的主観から力を得るさまが書かれていると思います。

「WindowsXPの遙かな丘陵／「閉じる」で消した記憶があって」氷丸（茨城県）

もしかしたら壁紙のことをいっているのかもしれませんが、「WindowsXP」と「遙かな丘陵」という言葉の接続がなぜか美しく、陶然としました。

「星と呼べるなら歩いていけるんだ／世界中のあなたに言ってる」いまはじまるの（兵庫県）

「世界中のあなた」が新しいです。世界中のそれぞれの「わたし」の心を射貫き、振り向かせるような力があると思います。

「こおつうけえ／あいしいかあどを／かざせども／残高不足の／音が鳴るだけ！」折田
日々希（神奈川県）

驚き、焦り、いらだちのようなものが、何らかの声を作っています。それが音声なのか、
心の声なのかは問題ではないでしょう。声とは何かを問いかける一作です。

「悩みごと尽きぬところに／／焼き芋を剥けば／あふれるこがねの波濤」さいう（愛知県）
悩みごと一気に吹き飛ばす「あふれるこがねの波濤」の迫力。「焼き芋」という小さな
日常から異次元への跳躍が鮮やかです。

「後肢の癖に見覚え獅子の舞」奎いう子（佐賀県）
目の前の獅子が獅子でなくなった瞬間の息をのむ感じがそのまま伝わってきました。微笑
ましさのなかにしずかな震撼が潜んでいます。

今月は全体的に作品のレベルが高かったように思います。また、今月は新しく登場された
方を中心に選評を書きました。それでは次回も楽しみにしています。